

2009年1月24日(土)～25日(日)、広島YWCA主催の平和プログラム「分かち合おうヒロシマを…」を開催しました。広島YWCAで活動する「ヒロシマの今から過去を見て回る会」のメンバーが、平和公園から広島YWCA周辺の碑めぐりと、被爆電車での市内案内を担当し、朗読グループ「夾竹桃」が、ヒロシマの人々の目となり耳となり、母や娘の声を、朗読劇を通して参加者に伝えました。また被爆証言や被爆者支援の活動を長く続けてこられた方たちから、原爆の投下が引き起こした破壊と惨状、現在までカラダと心に哀しみや痛みを抱え続ける被爆者の現状とさまざまな思いを伺いました。

「私だけ生き残って、申し訳ない」「"助けて!"という叫び声を聞いたのに、助けられなかった。申し訳ない」「Remember HIROSHIMA!ではなく No More HIROSHIMA なのです。こんな苦しみや悲しみは私達で最後にしてほしい」「平和な時代には虫も殺さないような人でも、私たちだれもが、戦争になれば人を殺す可能性がある。強くならなければ」…。

生き残った人が抱える悲しい思いと苦しみだけでなく、平和への強い願いと行動力を目の当たりにし、(比較的)平和と言われる時代の日本で生きる私たちは、こういった声や想いをどう受け取り、伝え、行動に移していけばよいのか。参加者だけでなく、広島YWCAメンバーも共に考えることとなり、ヒロシマを「学習する」のではなく「感じて」「分かち合う」機会にしたい、という広島YWCAメンバーの想いが実現した2日間でした。

ヒロシマは「遠いあの日の悲惨な出来事」の証明ではありません。私たちすべての人間がもつ「弱さ」に対する警告であり、被害と、加害の罪の証拠です。収容された重症者の中にわが子の名前を狂ったように叫びながら探す母親の、お母さん!と叫びながら亡くなった女学生の、そして叫ぶことすらできないまま蒸発してしまった爆心地近くの人々の叫びを聞き、ひとりひとりの命の尊さを想い、「私たちは戦争の被害者だけでなく、加害者にもならない」と誓う場です。

「次の世代や広く世界にヒロシマを伝えられるのは、被爆者や被爆二世、広島在住者だけとは、もう言えない状況」なのだと、被爆者の方は語りました。残念ながら被爆者の高齢化は進み、被爆電車や被爆した建物の老朽化が進んでいる昨今。あの日のヒロシマの惨状と、失われてしまった多くの命があったことを私たちに語り伝えてくれる人びとが、年々少なくなっています(10年もすれば、直接聴ける機会がなくなるだろうと言われます)。写真や資料はインターネットや書籍で見ることができるようでしょう。けれども、ヒロシマを生きた人々の声や想いと、実際にそこに「存在した」という証明は、ここ広島の地から感じられるのです。そしてこの広島から世界に向けて平和の創造のためにできることは、ヒロシマの事実と教訓を世界の多くの、そして様々な世代で分かち合い、世界中の「No More!」という声を、YWCAというひとつの大きな行動力にすることだと思っています。